

「カンキツ高品質安定生産のための園地整備および樹体管理」

果樹試験場 常緑果樹研究担当 池田繁成

1. はじめに

平成二五年産カンキツにおいて高品質安定生産を図るためには、今の時期に生産基盤の整備を行い、より管理しやすく生産性の高い園地条件としておくことが重要です。同時に樹体の状況に応じた整枝・せん定を実施し、花と新梢のバランスの良い着花を確保することで春季以降の管理につなげていきましょう。

2. 園地基盤の整備

1) 間伐

密植園では樹全体に日当たりが悪くなることや、樹冠が接近している部位の着花が安定しにくいことから生産の安定や品質向上が図りにくくなります。くわえて温州ミカンで行うマルチ被覆作業の効率も悪くなるため、間伐を実施し独立樹としておきましょう。同時に作業道の設置を行うと防除や収穫といった管理作業の省力化も図られます。園地の改造を行う方法は様々です。小型の作業機械を活用することで比較的コストでも実施可能ですので、個々の園地条件に適した改善方法を検討してみてください。

2) 集排水路の整備

マルチ栽培において園地外から雨水が侵入したり、高畝栽培などで畝間に傾斜が無い場合にマルチ上に長時間降雨が溜ったりすることで、樹体に乾燥ストレスがかかりにくく品質向上効果が低くなっている場合があります。また近年は梅雨期を中心に「ゲリラ豪雨」のような局地的な集中豪雨に見舞われることも多くなり、園地崩壊につながる危険性も高まっています。このようなことから集排水路の点検や整備を行っておき、雨水が速やかに園外への排出されるようにしておきましょう。

3) マルチ巻き上げ施設

温州みかんのマルチ被覆は、夏期に行うことから体力的に非常に大変な作業です。また早熟系や早生栽培園では、被覆時期が梅雨期にかかってしまい作業計画も立てにくいことと思います。しかしながらマルチの被覆効果を十分に発揮させるには、適期に被覆を行い樹体に十分な乾燥ストレスをかける必要があります。このため既に導入されている園地も多いと思いますが、マルチを巻き上げ方式にすることで被覆作業の省力化と適期被覆を図るよう改善していきましょう(写真1)。先に述べた間伐を併せて行い、直列植栽とすることでより導入しやすくなります。



写真1 巻き上げ方式によるマルチ被覆状況

巻き上げ方式のメリットは、被覆作業が省力化されることだけではありません。マルチの開閉が容易になるため、被覆後に土壌乾燥が十分でない場合には、晴天日に開放することで土壌の乾燥促進を図ることができます。一方で、土壌が乾燥しすぎて酸高が心配される場合には、降雨時に開放することで品質のコントロールを行うことができます。今後とも持続的にマルチ栽培を実施していくうえで、巻き上げ方式の導入は最も重要なポイントと考えます。計画的な導入を図っていきましょう。

4) かん水施設

昨年は九月中旬から一〇月中旬にかけて極端な少雨となり、早生温州や普通温州、中晩柑において肥大の抑制や減酸の遅延がみられました。マルチ栽培温州ミカンや不知火等では、降雨が少なく樹体に乾燥ストレスが掛かりすぎる場合には、葉水やかん水が必要となる場合があります。樹体への効果は葉水よりかん水のほうが大きいものの、手かん水では労力かかることからかん水施設を用いることが効果的です。かん水施設といっても本格的に配管を行うものから、比較的lowコストな簡易貯水タンクと少量かん水チューブ（写真2）を利用するものまで様々な種類があり、それぞれの園地条件に応じた導入が可能です。



写真2 かん水チューブ設置状況（2タイプ設置）

3. 温州みかんのせん定管理

1) 今年の着花について

第一表に昨年の県内着果調査の結果を示しています。これによると早熟系温州は県内各地区とも多く、早生温州では県全体では中程度ですが産地によってややばらつきがみられています。普通温州も同様の傾向にありましたが、早生温州より地区ごとの着果のばらつきが大きくなっていました。これらのことから今年の着花は、早熟系早生温州では例年並みの着花が早生および普通温州においては中程度の着花が確保できると考えます。ただし早生・普通温州では、昨年の着果量や新梢の発生程度により園地間や樹毎に着花量に差が生じてくると思われます。

第1表 品種別・地区別の着果状況(H24.7着果確認会)

品種系統		佐城	三神	杵島	藤津	東松浦	西松浦	全体
早熟系早生	着果量	多	多	多	多	多	多	多
	新梢量	中	中	中	中	中	中	中
早生	着果量	多	多	中	多	中	中	中
	新梢量	中	中	中	中	中	中	中
普通	着果量	中	多	中	中	少	中	中
	新梢量	多	多	多	多	多	多	多

2) せん定管理

早熟系温州では着花過多による樹勢弱化を防止するため、着花量の制限と新梢確保を主眼にせん定を行います。具体的には樹勢が弱くなっている枝や下垂した側枝の切り返しせん定を主体に行うとともに果梗枝を利用して新梢を確保するようにして下さい。早生温州では結果母枝が十分確保されていれば、長くなった側枝の切り返しや予備枝せん定を行います。結果母枝が少ないようであれば、軽度の間引きせん定と果梗枝の除去にとどめます。高糖系普通温州では、比較的短くて着花しやすい新梢を数多く発生させることが連年結果のポイントとなるため、軽めの間引きせん定と並行して枝の誘引を行って樹形を整えます。強い切り返しせん定は徒長枝の発生につながるため行わないようにして下さい。これにくわえ発芽後に新梢の多い部位で有葉花の摘蕾を行い来年の結果母枝とします。

昨年一二月より低温が続いており、いずれの品種においてもせん定を行うに当たっては落葉の程度を確認してください。過度の落葉がみられる園地におけるせん定は、枝枯れ防止のために落葉部位の切り戻し程度にとどめます。

3) 隔年交互結実栽培園でのせん定管理

本年から導入を行う園地では、三月上旬頃に刈り込みせん定を実施します。極早生や早生温州では除葉率四〇%を目安に行い、普通温州ではこれより軽めの二〇～三〇%で実施します(写真三)。本栽培法を成功させるポイントは、健全な夏枝をいかに多く発生させるかにあります。そのためには母枝となる均一な春枝の確保が重要であり、春季の刈り込みせん定は必ず実施して下さい。また実施二年以上経過した園地でも、夏枝の確保と枝の間延びを防止するため刈り込みせん定を行います。一方、本年結実させる生産園では枯れ枝の除去など、最小限の枝の整理に止めます。

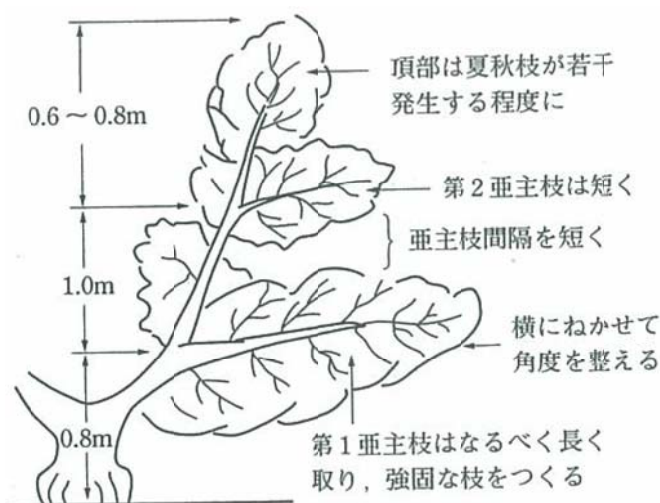


写真3 遊休樹の春剪定後の状況(大津4号)

4. 中晩柑のせん定管理

1) 不知火

着花性が良く新梢の発生も多い品種であり、大玉果生産のためには良好な結果母枝の確保がポイントとなります。下垂して樹勢が弱くなっている枝は、間引きせん定で除去するか水平となっている部位まで戻って切り返しせん定を行います。また枝間の間隔は広めにして、樹全体に日光が当たるようにします。特に幼木から若木の園地では、せん定だけで樹形を整えようとせずに誘引も併用しながら花と新梢をバランスよく確保するようにしてください（第1図）。



第1図 不知火の樹形目標（デコポンを作りこなす）

2) 清見

新梢の発生量が多く枝が混みやすいため、亜主枝を二本として枝の間隔を広くする二段盃状形に仕立てます。樹全体に日照を確保するため樹冠上部の枝の間引きを行うとともに、先端が下垂しすぎた側枝の切り返しを行います。隔年結果がひどい園地で本年の着花が少ないと思われる場合は、強いせん定は行わずに誘引で樹形を整えてください。

3) せとか

熟期が遅いことや短い春枝が多く発生しやすいことから、隔年結果しやすい品種です。したがって着花が多いと思われる場合は、春枝が密生している部位を中心に切り返しせん定を行って着花量の制限と新梢確保を図ります。着花が少ないと思われる場合には、着花を確認してから最低限の間引きせん定と新梢整理を行います。

4. おわりに

樹体管理については整枝・せん定だけでなく、土壌改良など他の管理も含めて実施して高品質安定生産につなげることが重要です。また、マルチの巻き上げやかん水施設など園地基盤整備は、本年での実施が不可能な場合でも既に導入している園地の状況把握を行って来年以降の取り組みにつなげてください。